

環境を視点にした「地域学習」のカリキュラム

— 附属桃山中学校の取り組みから —

田中曜次^{*1}・溝部卓司^{*2}

Curriculum of "community learning" from an environmental viewpoint
A Case Study at Momoyama Junior High School
Attached to Kyoto University of Education

Yoji TANAKA Takuji MIZOBE

抄 録：本稿では、京都教育大学附属桃山中学校（以下、本校と略す）で、「総合的な学習の時間」として実践されている内容の変遷をたどることによって、この学習が抱える課題を整理したいと考えた。そして、その中から課題に対する取り組みの 1 つとして中学校 1 年生を対象として行われている、「地域学習」に焦点をあて、その成果について検討した。その中から「地域」を学ぶ時の「環境」からの視点の必要性について報告する。

キーワード：総合的な学習 地域学習 課題学習 グループ活動

I. はじめに

平成 20 年に改訂された『学習指導要領』によって、「総合的な学習の時間（以下、「総合的な学習」は削減された。教科の授業を重視する傾向に大きな変化は見られなかった。一方、大学の教職課程では、平成 30 年度の大学入学生から、「総合的な学習の時間の指導法」が「各科目に含めることが必要な事項」として明記され、授業が始められつつある。

これまでから、「総合的な学習」にはさまざまな批判があり、「ゆとり教育」とともに改善すべき対象とされてきた。しかし、その成果について『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総合的な学習の時間編』では、「総合的な学習の時間の役割は OECD が実施する生徒の学習到達度調査（PISA）における好成績につながったことのみならず、学習の姿勢の改善に大きく貢献するものとして OECD をはじめ国際的に高く評価されている。」としている。

このように今後しばらくは、「総合的な学習の時間」はさまざまな意見の中で継続されるようである。小中学校においては、ほとんどの学年で週 2 時間程度の授業が行われることになり、これまでの成果や課題を踏まえた実践が求められている。

本稿では、まず附属桃山中学校において検討された、「総合的な学習」の全体構想やカリキュラム編成を通して、これらの学習の目標や、活動の意図などを確認したい。そして、その実践の中で明らかになった課題を整理し、その解決のために改善された 1 年生を対象とする「PRE MET」

^{*1} 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 同志社大学

^{*2} 京都教育大学附属桃山中学校

と呼ばれる「総合的な学習」について再検討する。

Ⅱ. 総合的な学習の構想

2.1 総合的な学習の構想

「総合的な学習」の目的や方法について、本校では議論があった。中でも、生徒の「体験」を重視するか、学習の「内容」を重視するかについては、以下のような議論がとなっていた。

一つの教科の枠組みの中ではとらえきれない、「環境問題」や「国際理解」は、さまざまなアプローチを実践できる場面として「総合的な学習」は有効であると考えられた。これとは別に、「自分探しの旅」というコンセプトを持った体験重視の「総合的な学習」も存在した。

もう一つは、学校や学年の指導計画に関わる問題である。教科の学習内容が削減されるという状況の中で、複数の教科が同じテーマを分担して扱うという教科横断的なアプローチであった。学習の内容にかかわることがらと「育てたい力」などを関連付けるクロスカリキュラムなどさまざまな取り組みが行われた。「石垣島の空港建設の問題を通して意思決定能力を育てる」というようなものである。そしてこれらが指導計画の中に位置づけられていった。

このように、「内容」「体験」「資質・能力」などたくさんの論点を作りながら、それらを調整して「総合的な学習」は構想されていった。

2.2 附属桃山中学校における「総合的な学習」の構想

京都教育大学附属桃山中学校（以下本校と略す）で総合的な学習が始まったのは、平成 10 年（1997 年）度からである。この年の学習指導要領の改正に先駆けて、第 15 期中央教育審議会の第 1 次答申とそれに続く教育課程審議会の中間まとめなどにおいて「総合的な学習の時間（仮称）」の概略が示されていた。この答申は、この後大きなキーワードとなる「生きる力」が初めて示されたものである。そして、この「生きる力」をはぐくむためには「横断的・総合的な学習」が必要であることが述べられていた。（文部科学省 1996）また、「中間まとめ」では、「総合的な学習の時間（仮称）」について、先の答申に加えて、「ねらい」「位置付け」などが示されていた。これらの内容を検討することから本校の「総合的な学習」の構想は始まった。（京都教育大学附属桃山中学校 1997）

この「中間まとめ」の中には、総合的な学習の「ねらい」として「自己学習力の育成」、「学び方やものの考え方の習得」、「身につけた知識や技能の総合力の育成」があげられており、「学習方法」が重視されていた。そのため構想を進める中で議論の中心になったのが、「学習方法を学ぶ」という学習の進め方であった。それまでの中学校の授業では、そのほとんどが「内容重視」であり、「学習方法」は学習の結果として学ぶということが多かった。部分的には「学習方法」を指導することはあっても、多くの場合は内容の理解より優先されることはなかった。

もう 1 つの問題は、学習の「積み重ね」を保証するかであった。全国の附属学校などでは先行研究を様々な形で行っており、発表や報告が行われていた。本校においてこれらを整理すると、学年を主体とした「総合的な学習」では、内容や方法について「積み重ね」が進みやすいことがある。一方、テーマや課題は事前設定されていることが多く、生徒が選択する幅は狭められるこ

とがわかった。生徒の選択を保障しながら、学習の内容や方法を深めることをねらいとして、タイプの異なる「総合的な学習」を並行して行うという方法だった。滋賀大学附属中学校の「BIWAKO タイム」という「総合的な学習」は、琵琶湖を対象として異学年で編成された小グループが探究学習を進めるというものであるが、同時に「HUMAN タイム」という学年進行型の学習を行っている。前者は琵琶湖について様々な形でアプローチを行う探究学習であり、後者は「人権」や「福祉」などの内容を学ぶものであった。しかし、両者を深く関付けようという意図は明確には示されてはいなかった。

今日的な課題、例えば「国際理解」や「環境」は課題自体が総合的で多様な学びを要求しているという認識から、「総合的な学習」においても同一の課題に対して様々な方法・角度・手段からのアプローチを試みるのが望ましいと考えた。

以上のようなことから本校では、「学び」の内容と方法の両面からの質的なレベルアップをめざし、同一課題に対して、学年ごとに学習を積み上げる学年進行型の学習と異学年混在型の学習の2つのアプローチを試みる「総合的な学習」を構想することになった。

Ⅲ. MET と PRE MET

3.1 共通必修と応用選択 (MET)

先に述べたように、2つの学習を並行させる中で、内容は継続的に積み重ねられなければならない。そのためにはこれまでの本校の研究成果や実践をベースにする必要があった。そこで、「環境」「国際理解」「福祉・健康」の3つを「系」と呼び、基本的な学習のテーマとした。(のちに「生き方」が設定された)各教員はこのいずれかに属して、「系」の3年間のカリキュラムを検討することになる。

本校の「総合的な学習」は3つの学習から構成されている。(図1)

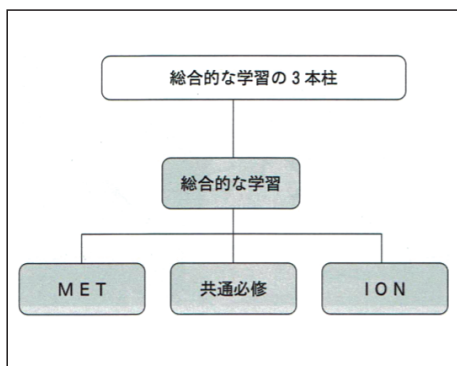


図1 総合的な学習の時間の構造

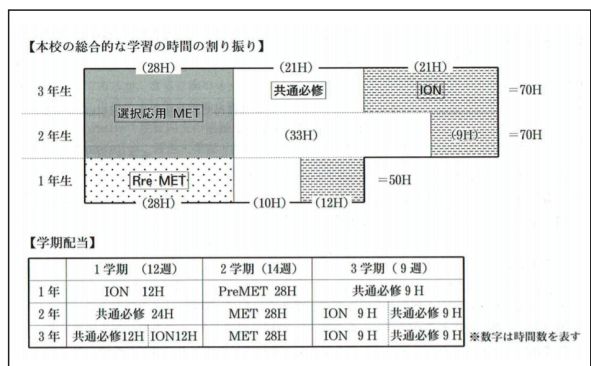


図2 総合的な学習の時間の授業数(初期)

共通必修：学年ごとに行われる学習。各「系」の目標や内容を踏まえて、全生徒が共通して学習する内容と方法を設定する。クロスカリキュラムなど教科を中心とした授業や、学級などの特別活動として行う場合がある。

選択応用：本校では「MET (Momoyama Explorer's Time の頭文字)」呼んでいる。授業は異学年混在、縦割りで行われる。生徒は3つの「系」の中に設定される「コース」から自由に選択する(定員を越えると抽選)。共通必修では行えない「総合的な学習」を行う。毎年15程度の「コース」が設定され、2学期を中心に学習が進められている。時間数は、オリエンテーションやまとめまで含めて28時間、通常の活動期間の授業は、2時間続きで行われている。

このほかに、「情報」の授業 (ION) が別に設定されている。

京都教育大学附属桃山中学校 (2012) 図1, 2も同様

このような形で始められた「総合的な学習」であるが、その後の学習指導要領の改訂により「総合的な学習」の時間が削減されたため、カリキュラムの見直しが進められている。しかし、METについては、以前からの28時間を基本とした学習が続けられている。(図2)

表1 METの授業計画

日程	時数	主な内容	
第1回	1	全体オリエンテーション	全体で説明を聞く
第2回	2・3	コース別オリエンテーション	各コースに分かれて、学習計画を立てる準備を行う。
第3回	4・5	グループ別 課題設定	グループごとの活動
～	～	体験学習 調査活動 講演	校外での活動(見学・調査)
第11回	18・19	整理 検討	図書室やPC教室
第12回	20・21	発表準備 まとめ作り	
第13回	22・23	コース別発表会	各グループの発表
第14回	24～27	全体発表会	代表による発表
第15回	28	まとめ	振り返りと自己評価

3.2 PRE MET の開始

先のような形で始まった本校の「総合的な学習」であったが、いくつかの問題が報告されていた。初期のMETのコース設定では、「インタビュー」、「写真」、「(環境)パトロール」など学習方法を意識したものであった。しかし、学習方法は共通のものであり、一部コースが優先されるということとはできない。このようなことから、各コースが「野鳥」や「紙づくり」といったものを設定するようになった。

さらにもう1つは、グループによって学年間の交流に差がみられることであった。異学年混在によるグループは、性別やこれまでの関係などで左右され、一部ではあまり機能していない状況

があった。このようなことから MET の中心に「総合的な学習」のカリキュラムを見直すことになった。

平成 15 年度の 1 年生から、それまでの MET と並行して PRE MET という「総合的な学習」が始められている。これは 1 年生全体を、「歴史」、「環境」や「産業」など 3 つ程度のテーマに分け、伏見の地域学習を行うというものである。基本的には 3 ～ 5 名程度のグループで、テーマに沿った課題を設定し、伏見について探究する形をとっている。生徒は「酒」や「伏見城」といったものだけでなく、「水」や「河川」、「生態系」などを課題として設定し学習を進めている。

表 2 PRE MET の授業計画 (例)

日程	時数	主な内容	
第 1 回	1	全体オリエンテーション	全体で説明を聞く
第 2 回	2・3	コース別オリエンテーション	各コースに分かれて、学習計画を立てる準備を行う。
第 3 回	4・5	グループ別 課題設定	
第 4 回	6・7	見学 講演など	校外での活動
～	～	体験学習 調査活動	グループごとの活動 図書室や PC 教室
第 11 回	18・19	整理 検討	
第 12 回	20・21	コース別発表会	
第 13 回	22・23	学年発表会	各グループの発表
第 14 回	24～27	全体発表会	代表による発表
第 15 回	28	まとめ	振り返りと自己評価

3.3 PRE MET 「環境」コースの実践

これまでに行われてきた PRE METMET の実践から、その学習の特徴を整理すると以下のようになる。(図 5 生徒作品より)

- ・地域を知る時間や活動を多く取り入れている。

附属学校の特徴でもあるが、通学範囲が広く、伏見を知っている生徒は少ない。中には初めて伏見に来たという場合もある。そのため、前半部分では見学や講演を取り入れ、地域を知ることが重視している。「環境」の場合、京都市立青少年科学センターや京エコロジーセンターなどを見学するだけでなく、稲荷山など自然環境を調査する場合もある。

- ・「水」をさまざまな視点から探究している。

伏見の町が酒造りを産業の中心としていることは有名であるが、中学生にとっては「地下水」に注目しがちである。しかし、「環境」のなかの水を考えると、宇治川や桂川、そしてごみや生態系にも目を向けるようになってきている。

- ・1 年生全体として発表の内容や技能が向上している。

自分たちで調べ、まとめ、発表するという学習活動は良い成果を上げている。上級生に比べてまだまだ改善することは必要ではあるが、1 年生であっても発表する資料を作るために、自分

たちで工夫するということが積極的に行えるようになってきている。以前のように場合によっては見ているだけという状況は確実に減ってきている。

- ・限られた時間の中で課題設定を進めることの難しさ。

このような学習では、良い課題を設定するには、地域をよく知ることが必要になる。伏見の場合、「歴史」という視点が先に立ち、「環境」からみることは少ない。そのため「環境」では課題設定には苦勞することが多い。しかし、生態系やごみ問題などさまざまな課題を設定すると、これまでにない発見や気づきがあった。



図 3 生徒作品 発表資料とまとめ

3.4 学習の記録と評価

本校では、「総合的な学習」の記録として、「ノート」を使用している。ポートフォリオ的な要素もあり、生徒と担当の教員との間で授業ごとに配布回収されている。このノートによって学習の進み具合や問題などを把握し、以後の指導に役立てている。

評価については、図のような「評価票」(図 5)を作成している。これは、生徒自身の自己評価と担当教員の評価を併記することによって、各自の学習を振り返り、「わかった」ことや「できるようになった」ことだけでなく、自分達のコースやグループが何をねらいとしていたのかを確認することができるようになってきている。担当の教員は、本校の「MET」「PRE METMET」の全体

の目標である、「課題を設定・解決する力」「情報を活用・収集する力」「人とかかわることに関する力」の3つを観点として、各回の授業の中での活動を記録している。

本校では、教科の学習とは異なる「総合的な学習」の違いを明確にするために、このような取り組みを行っている。教科の学習以外の面からも生徒の成長を見守ることにより、「生きる力」の育成を目指している。

MET学習の記録 ()月()日()水)

本日の学習内容 :

活動場面 : ・討論 ・実験 ・調査 ・制作 ・発表
 学習活動の方法 : ・討論 ・実験 ・まとめ ・発表 ・その他 ()
 活動メンバー : ・個人 ・グループ ・ペア活動
 活動の自己評価 : <グループ活動> 2/3 3/4点
 ・協力して活動することができたか。 4 - 3 - 2 - 1
 ・学習意欲に高揚したか。 4 - 3 - 2 - 1
 <自分自身の活動>
 ・自分の役割を果たせましたか。 4 - 3 - 2 - 1
 ・自分の考えを述べられましたか。 4 - 3 - 2 - 1
 ・今日の活動に満足していますか。 4 - 3 - 2 - 1
 今後の成長に貢献・満足したか

担当の先生より :

観察 印

MET学習の記録 ()月()日()水)

本日の学習内容 :

活動場面 : ・討論 ・実験 ・調査 ・制作 ・発表
 学習活動の方法 : ・討論 ・実験 ・まとめ ・発表 ・その他 ()
 活動メンバー : ・個人 ・グループ ・ペア活動
 活動の自己評価 : <グループ活動> 2/3 3/4点
 ・協力して活動することができたか。 4 - 3 - 2 - 1
 ・学習意欲に高揚したか。 4 - 3 - 2 - 1
 <自分自身の活動>
 ・自分の役割を果たせましたか。 4 - 3 - 2 - 1
 ・自分の考えを述べられましたか。 4 - 3 - 2 - 1
 ・今日の活動に満足していますか。 4 - 3 - 2 - 1
 今後の成長に貢献・満足したか

担当の先生より :

観察 印

図4 METノート

MET (Keycap Explorer's Time) 評価票

()年()月()日 第 期

生徒氏名 _____

担任氏名 _____

1. 表の項目について自己評価しよう。

・学習には意欲的に取り組むことができた。 4 - 3 - 2 - 1
 ・学習の成果が満足している。 4 - 3 - 2 - 1
 ・目標に向かって努力をもって学習を頑張ることができた。 4 - 3 - 2 - 1
 ・学習の成果を今後の生活に活かそうと思う。 4 - 3 - 2 - 1
 ・グループ学習は有意義であった。 4 - 3 - 2 - 1

2. METの学習体験を通してどのような成長を得ることができたか。

3. 感想や今後のこと

観察 印

図5 MET評価票

IV まとめ

これまでの「PRE METMET」における学習内容やせいかについてまとめる。まず、「環境」に関わるものとして、以下のようなことがあげられる。

成果としては先に述べたように、「歴史」中心になりがちな伏見の地域学習において、異なる視点から課題を探求することができ、課題解決の方法が多様になったことである。それぞれの地域には特徴があり、わかりやすい視点からの学習が進めやすい。しかし多様な学びには結び付きにくい。「酒」を産業や文化的な面からだけでなく、「地下水」や「硬度」から考えるということは、このことを示していると考ええる。新しい視点加わることは、学習する生徒にとっては見方を変えるきっかけになると考える。

また、「環境」を視点にすることは、実験や観察という方法においても多様な探究が成立するきっかけとなっている。「生態系」という視点から河原の環境を調べたグループが危険外来種のヌートリアを見つけたことなどはこのことを示している。

これまでから、「総合的な学習」はさまざまな学習を取り込むように行われてきている。なかでも地域を対象とした学習は直接的な経験を豊かにできるという点からも有効な学習といえる。特に「環境」は「歴史」や「文化」に偏りがちな地域では取り入れるべきであると考えられる。

このように「総合的な学習」は多様な学びを取り入れることができる。しかし、そのことを担当する教師は十分に理解しているのかは不安な部分が多い。効率的でミスの少ない学びを求めることが良しとされている状況で、生徒が失敗しながらさまざまな学びを試すことが許されるのかは、教師の責任といえる。評価の部分でも述べたように、「総合的な学習」では教師と生徒の関係が一段と近くなっている。それだけ責任が重いということもできる。教職課程での「総合的な学習の指導」に関わる授業はこのようなことからその重要性は増すことになる。

そして、最後にカリキュラムの問題について触れておく。本校の「総合的な学習」のもう1つの柱である共通必修は、授業数の削減の影響を受けている。これは、網羅的に多くのテーマを扱ったため、一つ一つの学習がコマ切れになっていたという背景がある。時間がなく、十分な成果が期待できなくなり削減されるということであった。まとまりのある時間を確保することは「総合的な学習」の成立のためには不可欠である。

今後、「総合的な学習」を充実させるためには、「ゆとり」ある時間を保証し、「ゆとり」ある教員が、生徒の「ゆとり」ある学びを保障することが必要といえるのではないだろうか。

引用・参考文献

文部科学省（1996）「第15期中央教育審議会 第一次答申」『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』平成8年7月

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm) (2020/11/3 閲覧)

京都教育大学附属桃山中学校（1997）研究論集 1997

京都教育大学附属桃山中学校（2012）附属桃山中学校の総合的な学習の時間 MET 学習のまとめ